

IATSS三十周年によせて

年1%、生涯50%超、されど

青木正喜 成蹊大学工学部教授

1966年東京大学工学部電気工学科卒。72年同大学院博士課程修了と同時に成蹊大学工学部電気電子工学科助教授。76年から1年間、カナダMcGill大学客員研究員、84年カナダAlberta大学客員教授に就任(1年)、帰国後86年より現職。



はじめに

日本で1年間に発生する交通事故件数を100万件、日本の人口を1億人とすれば、日本では1人の人間が1年間に事故に遭遇する確率は1%であり、一生涯に事故に遭遇する確率は50%をはるかに超える。しかし、交通事故に関しては楽観主義者の立場の人が多く、自分だけは交通事故には遭わないと信じている。

交通事故体験史

筆者は数回の交通事故を体験しているが、幸いな事にいずれも大事には至っていない。高速道路もバイパスもない頃、東京から志賀高原まで3時間を切ると豪語する友人の車に乗った時には、後部座席でスキー用のヘルメットをかぶって横になっていたが、軽い接触事故で座席から落ちた。同じ頃、左ハンドルの車を運転中、対向車線に停車中の車の開いているドアに接触した。志賀高原のジャイアントスキー場の下を通るトンネルが中で直角に曲っていた頃、このトンネルにさしかかった時、対向車のライトの動きがおかしいので車を停止させたところ、壁に激突してこちら側に飛んできたが、間一髪正面衝突を免れた。山道ですれ違いざま、運転席右側の大型ミラーが対向車と接触し粉みじんになった。都内の個人タクシーで、運転手さんが高齢で操作がワンテンポずれ、危ないと思っていたら、追突された。2年程前、長野から志賀高原行きのバスで、チェーンを付けて山道を登りはじめた直後、トラックが上からスリップしてきてバスと正面衝突し、バスの運転手さんと、前方座席の乗客が負傷した。最近、家族が自転車に乗っていて、自動二輪に後ろからぶつけられ、打撲傷を負った。

筆者の独断と偏見に満ちた交通事故防衛策

- ・狭い道を歩行中、車が来たら道端すれすれまで寄ってよける。これは相手に道を譲るのではなく、相手の運転が下手で信用できないための自己防衛と考える。
- ・運転中は他車と張り合わない(牽制は必要)、挙動不審の車には近づかない。
- ・相手に危険回避行動を期待せず、自殺志願者の運転の事故の巻き添えを避ける。

提案

- ・怪我をしない程度の事故実体験を任意ではなくシステムとして教育制度に組み込む(例えば、スピードオーバーによるカーブの飛び出しを、シミュレータや低 μ 路ではなく安全対策をした簡易テストコース上で実速度で実体験させる)。
- ・学校では、交通教育の社会教育面と交通行動を明確に分け、基本的交通行動を徹底的に身体で覚え込ませる。
- ・「手を挙げて横断歩道を渡ろうよ」のようなお念仏から脱却し「自動車を信頼してはいけない、自動車は止まってくれない。止まってくれた場合には、運転手さんに確認をして、『ありがとう』と言って渡る」と具体化する。
- ・「自分は事故に遭わない」との幻想の心理的要因を解明し、実体を認識させる方策を考える。

このように、事故は起きるとの前提に立ち、事故に遭遇する確率を下げる方向へ、行動を伴った継

続的努力が必要である。